夢現

太宰遠愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢現

【Ｎコード】
Ｎ６６３３Ｓ

【作者名】
太宰遠愛

【あらすじ】
「魔法」が復活して数十年、世界は大きくの発展した。
その世界に生まれた、正夢を見て決して死ぬことができない不死身の身体を持つ少年、夏木。彼は自らを「化け物」と名乗り、苦悩し絶望する日々を送っていた。しかしある時、夏木を「化け物」と見破る少女が現れる。そしてひょんなことから人に憑く化け物「影」を退治することに。
「影」「魔法」そして「夢」。今、近未来シリアスファンタジーがここに幕を開ける！！

始まりの始まり（前書き）

かなり暗い物語です。自殺シーンが多々ありますので、苦手な方は引き返してください。
また、初の連載物なので、最後まで続くかわかりません（汗）。努力しますが、突然消えたら、作者がこの作品に飽きたとでも思って下さい。無責任でサーセンｍ（＿＿）ｍ
それでは、Ｌｅｔ'ｓ　ｇｏ！

始まりの始まり

「あんたの父親は、死神だったんだよ」
土砂降りの雨の中、傘も差さずに墓の前で低い声で呟く、フードの少女。
水溜りに映った俺は幼くて、少女に手を引かれていた。
屋上への階段を虚ろな足取りで上りながら、２５回目の夢の回想をする。
俺にとって、夢は特別な存在だ。普通の人が見るよな、朝起きたら忘れてしまうどっちでもいい夢が見られない。俺が見る夢は全て正夢。未来に起こることか、自分の過去だけだ。
だから、前の総理大臣が辞任する夢も見たし、どこかの火山が噴火する夢も見た。
周りは俺を羨ましがったが、俺にとっては苦痛でしょうがない。
小さな鉄製の扉を開け、排気ガスが充満する屋上へ足を踏み入れる。
とっくの昔に滅んだとされていた魔法が、数十年前に発見されてから、この国、いや世界は大きく発展した。
一言で説明すれば、某国民的アニメの２２世紀に近い、科学の発展した夢のような世界だ。
でも今の俺には、そんなこと関係ない。
塀をよじ登り、屋上の縁に立つ。１２０ｍの下には、たくさんの車が行き交っている。
「夢ほど残酷なことは無いわ」
あのフードの少女の言葉が蘇る。俺を縛り続ける言葉。でも今日で開放される。
くすんだ青空に、ふわりと足を踏み出す。
さようなら、僕を苦しませる「夢」お姉ちゃん。

俺は化け物。

白色の天井、枯れた花が生けてある花瓶、服が散乱している部屋。
どう考えてもここは俺の部屋で、俺のベッドだ。違ったとしても、少なくとも俺が行きたかった所じゃない。
「あ、夏木、目が覚めたのね！」
枕元で雑巾を絞っていた少女が、飛びついてきた。
「もう、また飛び降りるなんて、何考えているのよ！今月に入って何回目！？」
「３回目」
「何でそんなに繰り返し飛び降り自殺なんて考えるのよ。何度も失敗しているんだから、やめればいいのに」
「自殺志願者は、何度失敗しようと何度でも繰り返すものなんだよ、死ねるまで。第一、そんなに迷惑そうに言うなら、いつも自殺未遂した後に部屋に来るの、やめればいいだろ、菜ノ葉」
「幼馴染なんだから、当然でしょ！まったく、せっかく心配してあげているのに……」
「心配してくれなくていいから。ほら、帰れ、帰れ」
「ひっどーーーい！！こうなったら、何があっても絶対帰らないんだから！」
菜ノ葉はぷいっとそっぽを向くと、ぶつぶつ呟きながら、勝手に部屋を掃除し始めた。
幼馴染の菜ノ葉は、俺が孤児院にいた頃からの仲で、小５の時に菜ノ葉は里親に引き取られたが、何故か中学も高校も同じ学校で同じクラスだ。
ふと、手首を見る。そこには過去の傷が無数についていた。
何故死ねなかったのだろう。死ねないのだろう。
屋上で起きたことを思い出す。
俺は確かに塀をよじ登り、光化学スモッグで淀んだ空に飛び込ん

だ。落ちるときのあの心地よすぎる風も感じた。なのに俺はここにいて、このベッドの上で寝転がっている。
自殺未遂をする度に、謎は深まる。
今までにいろんな方法で自殺を試みたが、全部失敗に終わっている。気が付くと、このベッドの上にいるのだ。
正夢見て、ありとあらゆる術を使っても死ぬことができない不死身の体。

俺は化け物だ。

「まあ、孤児院育ちで過去が分からないから、いろいろ不安なのかもしれないけど――って、何処に行くのよ、夏木？」
「コンビニ」
「あたしが行くからいいよ。夏木はおとなしく寝てて」
「お前は俺の母親かよ。コンビニくらい一人で行けるから。留守番よろしく」
菜ノ葉が何か叫んだのが聞こえたが、無視して家を出た。

彼女もまた…

何故こうもついていないのだろう？
さっきまで快晴だった空は、一気に灰色の雲に覆われ、大声を上げて泣き出した。
コンビニへ入った時は、まだ降ってなかったんだけどな……雨で、髪の毛がペッたんこだ。
走るのも面倒くさいので、ゆっくり歩いていると、ビルとビルの間に、少女がうずくまっていた。
周りに猫がたくさんいるから、餌でもあげているのだろうか。
いくら猫好きの俺でも、普段だったらそのままスルーしていくのに、何故か足を止め、少女の背中をしばらく見つめてしまった。そしてあろうことか、話しかけてしまった。

足を止めてはいけなかったのに。話しかけてはいけなかったのに。

「猫、可愛いね」
少女は振り返ると、目を見開いて、俺を見つめた。
雨でしおれたツインテールを静かに揺らしながら、立ち上がり、顔を近づける。
そして舐め回すように俺を見ると、首筋に顔を近づけ……噛み付いてきた！？
「うぎゃあぁぁぁ！！！」
少女を突き飛ばして、首筋を触ると、ぬるぬるした生暖かい感触がした。アスファルトにも、所々に赤い斑点が付いている。
まずい、このままでは、何されるか分からない（どうせ死ぬことは無いだろうけど）。
身の危険を感じ、全速力で逃げ出そうとした時だった。
「こっち」

振りほどけないほど力強く腕をつかまれ、反抗する間もなく、そのまま路地裏に連れて行かれてしまった。

「ここまでくれば人いないから…」
「そ、そうだね」
かなり走ったから、息ができない。特に運動不足の俺には辛い。
それに比べ、少女の方は息一つ乱れていない。さっきのことといい、一体コイツは何者なんだ？
「よかった、血、止まったのね。食べちゃって御免なさい。美味しそうだったからつい…」
美味しそうって……こいつは人食いか何かか？
「別に気にしてないからいいよ。じゃあ、俺、帰るから」
気にしていないなんて大嘘だが、思いっきり猫かぶって笑った。他人に根暗な部分を見られるわけにはいかない。
「待って。あなた、影が憑いてる…」
再び馬鹿力（？）で腕をつかまれる。翡翠の瞳がじっと俺を見つめる。
一瞬見惚れてしまったが、すぐ我に返り、嘘笑いを浮かべながら冷静に答える。
「影がついているのは当たり前だろう。でも今日は雨だから、見えないね」
「そっちの影じゃない。あ、でも…」
今度は黙り込んでしまった。まったく、不思議な子だな。
これじゃあ埒があかないので、少し怒声を含んだ声で言った。
「いい加減に帰らせてもらうよ。君も帰ったほうがいい。風邪引いちゃうよ」
「私は風邪引かないから平気。それよりまた会いたい、あなたに」
いきなり逆ナンかよ！俺は、逆ナンする価値も無い、最低最悪の人間ですよー。

「ごめん。俺、女の子には興味無いんだ。そういうことは、ほかのイケメンに…」
「ナンパじゃない。話すことがあるだけ。私、カスミ。あなたと同じ――化け物」

影

『あなたと同じ――化け物』
あいつ、なんで俺が化け物だと分かったんだ！？
カスミと名乗る少女の告白を聞いた後、俺は逃げ出した。いくら雨が降っていようとも、気にせず走り続ける。
予知夢を見て、決して死ねない身体だと知っているのは、菜ノ葉だけのはずなのに。
菜ノ葉が言ったのか？いいや、アイツは口だけは堅い。そもそも、あんな変わった知り合いがいるなんて聞いたことが無い。
ようやく家に着いたときは、全身びしょびしょで、顔は涙で酷いことになっていた。
「あ、お帰り。やっぱり雨に降られたんだね……って、どうしたの！？泣いてるの！？」
「…なんでもねぇよ。もう、帰っていいから」
菜ノ葉を避けるように寝室に入り、ベッドに倒れこむ。
何で俺が化け物だって分かったんだろう？見た目だけじゃあ分かるわけは無いはずだ。第一、化け物と言う呼び名は、あの幻が俺をそう呼んでいたから…。だから、世界共通で決まっているわけじゃない。
いったいどうして……

雨に濡れたコンクリートの匂いで、目が覚めた。
どうやらいつの間にか眠っていたらしい。雨もすっかり上がっている。
リビングへ行くと、机の上に好物のシチューとサラダが置いてあった。きっと菜ノ葉が作っていったのだろう。隣に「風邪を引かないように、ちゃんと温かくするんだよ。シチューはまだ鍋に残ってる

から、好きに食べてね」とメモがあった。まったく、あいつは俺の嫁かお袋かよと思いつつ、ありがたく頂こうとして気づく。これ、空っぽだ！サラダは残ってるけど、シチューは綺麗に（にんじんとブロッコリー以外）食べてある！

「ああ、ようやく目が覚めたのね。あまりにキミが起きるのが遅いから、待ちくたびれてシチュー完食しちゃったわ」

雨の中で聞いた、優しく綺麗な、そして恐ろしい声。全身の毛が逆立ち、鳥肌がブワッと立つ。

美しい翡翠の瞳の少女は、そこにいた。

「なんでお前がここにいるんだよ！？」

「話がまだ終わっていないのに、勝手に逃げたから追いかけてきたのよ。まったく、人の話は最後まで聞けって、教わらなかったの？」

そ、そうだけど…。あの時はお前があんなこと言うから、逃げたんだよ！

「まあいいわ。お風呂とこのシチューで許してあげる」

こ、こいつ勝手に人の家に上がりこんだ挙句、風呂まで借りたのか！？どういう神経してるんだよ。

「帰れ、頼むから今すぐ帰ってくれ」

「嫌よ！どうしてもキミに話さなきゃいけないことがあるの！」

「お前に話す必要があっても、俺には必要ないから」

「あなたが化け物でなくなるとしても？」

俺の瞳の奥を、翡翠の瞳が見据える。

俺が化け物じゃなくなる？そんなことってあるのか？今まであらゆる手段を使っても死ねなかった俺が、死ねるようになるのか？普通の夢を見られるようになるのか？

俺のことを知っているなんて、きっとこいつは只者じゃないはずだ。信じる価値はある。それに信じれるならば信じたい。信じれるなら…

「…わかったよ。聞くだけだからな。そしたら帰れ」

「わかったわ。あぁそうそう、鍋の中にシチュー残ってるから、良かったら食べれば？」

こいつ、さっきから何様のつもりだ？ここは俺の家だぞ。
とりあえずシチューを盛ってきて、食べながら聞くことにする。
「じゃあまず…１２年前の爆発事故は知ってる？」
「当たり前だ。近代史でも理科でもさんざ習った」
１２年前の爆発事故とは、人々が「魔法」と呼ぶ特殊能力を発見した研究所が、謎の大爆発のことだ。その際魔法を発見した研究者、通称「死神」が死んだ事件としても有名だ。
「そのときに『影』という物質がたくさん逃げ出したの」
「え？でも実験体（モルモット）が逃げたりしたとか、変な物質が流出したりした話なんて聞いたこと無いぞ」
「ええ。だって実験体でも物質でもないもの。そもそも存在していたかどうかも分からないようなメルヘンな物で、国のトップもメディアも、誰一人も信じなかったから知ってる人はごくわずかよ」
「メルヘンな物って…どういうことだよ？」
「一言で言ってしまえば、魔法の副産物よ」
「副産物？」
「魔法はね、夢を見るときに使う力でできているの。だから個人差はあっても、世界中の、老若男女、だから夢さえ見られれば動物でも使えるわ。夢さえ見れれば動物だって使えるわ。世界では一部の人しか使えない特殊な物扱いされているけど」
何かを思い返すように静かに語りだす。
「影は元々、夢の中にしか存在しない怪物なんだけど、魔法を使うと時々出てきてしまうことがあるの。出てきた影は強い負の感情を持つ人間に取り憑き、取り憑いた人の願いを叶えるの」
「なんだよ、いい奴じゃないか」
「ここだけ聞けばそうね。願いを叶えれば叶える程人間は強欲になり、最終的に世界を変えたり、歴史…つまり人間の生死に関わることを願うの。例えば不老不死になりたいとかね。
そうなると影は、取り憑いた人の体を代償にもらうと言うわ。もちろん思い留まる人もいるけど、大体の人間は体を差し出して願いを

叶えるわ」
「そ、それって一大事じゃないか！」
「もちろん大問題よ。だから私が退治してる」
「退治してるのはお前だけなのか？」
「ええ。何しろ数が半端じゃないし、世界中あちこちにいるから、いろんなところに行かなくちゃならなくて、毎日目が回るほど忙しいわよ」
「そんなに大変なら、いっしょに退治してくれる奴を探せばいいじゃないか」
大きなため息を吐き、肩をがっくりおろす。
「そんなことができるなら苦労しないわよ。影退治は普通の人間じゃできないの」
じゃあどんな人間ならできるんだ？
「奴らと同じ――影よ」
頭が一瞬真っ白になる。影にしか影は退治できないってまさか…。
「何よ、その目。私が影じゃいけないの？」
あでやかに、そして誇らしげに笑う。
「だって、それって仲間を……消してるってことだろ？」
ようやく出た言葉は、カスミを傷つけるような言葉だった。
「そうよ。でもしょうがないじゃない。私にしかできないんだから」
「か、悲しくないのかよ、仲間を消しても」
「全然。私は他の影とは少し違うから…」
一瞬、寂しそうで切ないような表情を見せた気がしたが、すぐにペラペラと喋りだす。
「そこで、長い間影退治をやってきたこの私の第六感によると、キミには影が憑いているわ」
やっぱり。まあ、聞きながらそうだとは思っていたけど…。
「でも普通に憑いているというわけじゃないみたいなのよね。ただ《憑いている》というより、《同化している》って言うのかな」
「同化？どういうことだよ、それ？」

「精神の奥底…普通の人じゃそこまで行かないはずのところまで影が侵食しているの。もはや、あなた自身が影とも言えるわ。ねぇ、子供のころ変なことしたとか、心当たりは無い？」
「悪い。俺、昔の記憶はほとんど覚えていないんだ。覚えている範囲だと、そんなこと無かったと思うよ」
俺には何故か、孤児院に引き取られてから――6歳からの記憶しかない。まあ、たとえあったとしても、「変なこと」なんて超アバウトに言われても分からないだろうけど。
「そうなの…。じゃあキミ、変な夢とか見ない？」
一瞬息が詰まる。ダメだ、ここであの幻（ユメ）を思い出しちゃダメだ…。
「どうかした？顔色が悪いわよ」
「…別に、なんでもねぇよ」
「その様子からすると…見るのね、変な夢」
「…正夢を見るんだ。しかも凶悪な事件とか、災害とかの。他に変な女が出てくる夢を見る。毎晩な」
「おそらくそれは影が見せてるんだと思うわ。変な女って言うのは…きっとキミが忘れてしまった記憶だと思う」
じゃあ思い出せれば俺は化け物じゃなくなるんだな！？
「ええ。夢も見なくなるし、死ねると思うわ」
喜びから一気に絶望へ突き落とされる。今、なんて…。
「だってキミ、死ねないんでしょう？」
「な、何で知ってるんだよ！？お、俺が死ねないってこと」
思わず立ち上がり、叫んでしまった。夢のことは話したけど、死ねないことは話してないぞ！なんでわかったんだ！？
「影は憑いている人間を殺さない。憑いている人間が死んでしまうと、影も消えてしまうから。だから、どんなに憑いた人間が死にたがっても、影が消えたがらない限り死ぬことはできないわ。まあ、影が死にたがるなんてありえないけどね」
「じゃあ影が俺の中から消えない限り、俺は死ねないのか…」
格好悪いと思ったが、膝をついてカスミにしがみつく。

「…お前は影が消せるんだろ？なら俺の中の影を消してくれよ。なあ、頼むよ」
カスミが哀れな目で俺を見下ろす。
「無理よ。影を退治するには色々条件が必要なの。もちろんいつかは消さなきゃいけないとは思っている。でもそれは『影を消す』という私の目標であって、キミの自殺を手伝うためじゃない。もし影を消せる条件が揃った時、今と同じ状況だったら……影を消して、キミの自殺を手伝うことになるなら、私はキミの影を消さないわ」
「じゃあ、どうすればいいんだよ…」
うなだれる俺の肩に手を置く。
「簡単な話よ。自分で自分の影を消せばいいわ」
「だって、影は影にしか消せないんだろ？それじゃあ無理じゃないか」
「さっき言ったでしょ。キミは最早、影同然の存在。だから、練習を重ねれば必ず退治できるようになるはずよ」
「練習って？」
カスミが、鳥肌が立つほどの万円の笑みで、ニヤァっと笑う。
「決まってるじゃない。実際に影を退治するのよ」

～主な登場人物紹介～

～登場人物～

上野夏木（うえのなつき）

現在高校2年生。影に取り憑かれている（同化している）ために死ねないので、影を祓うためにカスミとともに影退治をしている。6歳から菜ノ葉と孤児院で暮らしており、現在は学校の寮で奨学金をもらいながら暮らしている（ちなみに3ＬＤＫ）。何故か孤児院に入る6歳以前の記憶が無い。好きなものは話題のコンビニスウィーツ「ミラクルゼリー」とシチュー。

カスミ

影退治をしている影。見た目は18歳くらいのツインテールガール。夏木の家に勝手に居候しているが、一日の半分はいない。好きなものはミラクルゼリーとアップルパイ。

一条菜ノ葉（いちじょうなのは）

夏木の幼馴染で、夏木が自殺未遂する度に看病しに来る少々おせっかいなポニーテールちゃん。小学5年生のときに里親に引き取られたが、寮生活をしている。しかし、一週間に一度は必ず家に帰る。現在名乗っている苗字は旧姓で、引き取られた家の苗字は「鈴木」。夏木とは、小学校から高校一年生までの7年間学校も同じでクラスも一緒だったが、高校二年生になってクラスがわかれた。好きなものはクッキーとハンバーグ。

河村恵太（かわむらけいた）
夏木のクラスで一番のお調子者。夏木の寮の隣部屋なので、夏木の唯一の友達と呼べる存　在。噂によると、家がすごいお金持ちらしい。好きなものは冷やし中華。

鮎川梨王奈（あゆかわりおな）
夏木が所属する自然化学部の後輩で、やたらと幽霊に執着しているオカルト少女。影に取り憑かれている。常に自作のダンボール製のＵＦＯを持ち歩いている。

ヒトミ
学校の中庭にある噴水付近に出没する、一見幽霊に見えるが実は影。梨王奈の親友で本人曰く、「梨王奈を殺した」らしい。

～用語解説～

影
魔法を使うことによって夢の世界から現れる化け物。魔法を使わなければ、影の憑かれた人間以外には見えない。大きな負の感情を持つ人間に取り憑き、取り憑いた人間の願いを叶えてくれるが、叶えるたびに取り憑かれた人間は欲深くなり、最終的に生命や歴史、世界に関わることを願い、代償に体を奪われてしまう。体を奪われると精神だけが残り、影になる。
また、影は魔法を使うことができる。

魔法

本来は影が使う力。はるか昔に使われていたが一度滅び、数十年前に「死神」と呼ばれる研究者が復活させた。これにより、世界は近未来化した。

夢を見るときに使う力、「夢力（カフト）」を使う。一般的には選ばれた人間のみが使えるが、本当は個人差はあるが誰でも使えるらしい。しかし、使うときに副産物として「影」が夢の世界より出てきてしまう。

電波系オカルト少女

憂鬱。俺の今の気持ちは、まさにそれだった。鬱とはいえないし、怒りでもない微妙な感情。ここまで憂鬱になったのは、自分が死ねないと分かったとき以来だろう。
原因は、俺の前に突然ひょっこり現れた、あの魔性の女だ。
放課後の教室の窓から外を眺め、昨日のことを思い出す。
「影が憑いている人を探し出すって、どうやるんだよ？」
夕焼けにほんのり染まった自室で、俺はつかみかかる勢いでカスミに尋ねた。
「俺みたいな根暗を探せばいいのか？でも、大抵の根暗は猫かぶってたりするから、見た目じゃ分からないぞ、多分」
「影が憑いている人が必ずしも根暗とは限らないわ。うるさいくらいな元気な人もいれば、色々な意味で変な人もいるし、あなたの言ったような人もいる。まあ、まだ最初だし、とりあえず変な人には気をつけたいいかも」
変な人って…随分アバウトだな。
「兎に角、物は試しよ。明日は学校でしょう？学校にはいろんな人がいるから、一人くらいすぐ見つかるとも思うわ。大丈夫、私は行かないけど、一応強力な助っ人を送りこんでおくから」
す、助っ人？そんなのいるのか？
「まぁ、せいぜい頑張ってね～」
「あ、おい！」
それだけ言うと、ベランダから出て行ってしまった。
まったく、なんて無責任な奴なんだ。見た目はおしとやかそうなくせに。それに、強力な助っ人って誰だよ？助っ人らしき人なんてどこにもいないぞ。せめて名前だけでも聞いておけばよかったな…。
「上野～隣の彼女が呼んでるぞ～」
呼ばれて振り返ると、ドアのところで大きく手を振っている菜ノ葉

がいた。
「夏木～帰ろ～」
うげ。最悪。今日こそは見つからずに帰ろうと思ったのにな…。しかたない、あの手を使うか…。
「まったく、可愛い彼女がいて羨ましいぜ」
「彼女なんかじゃねーよ。欲しけりゃやるぜ」
クラス一のお調子者の河村を適当に払いのけ、菜ノ葉のもとへ行く。
「夏木、新しく駅前にできたアイスクリーム屋さんに行かない？すっごい美味しいらしいの」
「遠慮しておきます。ついでに部活に行くので一緒に帰るのも遠慮しておきます」
「なによー、また部活？どうせろくに活動してないんだから、行くことないじゃない」
「ほっとけ。それより、お前今日寮に帰らないのか？」
菜ノ葉は寮に帰る時、普通駅のほうには行ったりしない。友達か俺に誘われない限り。
「うん。今日はパパとママが迎えに来てくれるの」
この学校はわりと遠くから来ている人が多いので、ほとんどの生徒が学校に隣接する寮で暮らしている。菜ノ葉も例外ではなく、いつもは寮で暮らしているが、時々里親と食事をしたりなど、一家団欒の時を持っている。
「あ～あ、せっかく一緒に帰れると思ったのに。もう、サボりなさいよ」
お前と帰りたくないからわざわざ行くんだよ！なんて言うわけにもいかず…
「今日は部長に呼ばれてるから無理なんだって。じゃ、バイバイ」
と、適当に嘘をついてダッシュで逃げた。
俺の入部している自然科学部は、地下の第二理科実験室の隣の部室

が本拠地だ。気味がいので誰も近づきたがらず、入部したきり一度も来ない奴もいる。でも不気味なのを我慢すれば、涼しいし人も来ない最高の場所なので、俺はよく来る。
ようやく部室の前まで来て、妙なことに気付く。入り口に変な円盤があるということもあるが、それじゃない。
「あ、ドアが開いてるんだ」
そんなことくらい普通なのかもしれないが、自然科学部では異常なことなのだ。自然科学部の顧問は過剰な潔癖症で、ドアが開いていたり棚の中の実験器具が少しでもずれていたりするだけでも許せないらしい。だからドアが開いているわけが無い。
もしかしたら人がいるのかもしれない。いたとしても、どうせ部長か面識の無い部員だろうし、まあいいか。
そう思ってドアを開けたときだった。
「ついに姿を現したな、幽霊！」
「うわぁ！！」
変な液体が塗られた虫取り網が頭にかぶさる。な、なんじゃこりゃぁ！！
見ると、眼鏡をかけた少女がさっきの虫取り網をもって仁王立ちしていた。上履きが青だから、後輩か？
「ようやく捕まえたぞ、幽霊め！成敗してくれるぅぅ！」
今度はお札（しかもまた変な液体付き）を貼ろうと俺に迫ってくる。
「ちょ、ちょっと待てって！俺は幽霊じゃない…」
「問答無用！てやぁぁぁぁ！」
後ろは壁、横は棚、逃げ場は無い。まずい、殺される！そう思って腹をくくったときだった。
少女が急にピタリと動きを止め、お札が手から落ち、ついでに少女も崩れ落ち、その場で寝始めた。
いったいなんだったんだ、今の？俺は助かったのか？きっと助かったんだ。そういうことにして早く逃げよう……って、こいつが邪魔で逃げられねぇ！仕方が無い、殺される覚悟で起こそう。まあどう

せ死なないんだし。むしろ死ねるなら本望だ。
「おい起きろ、お前。邪魔だぞ」
肩を揺さぶるが、一向に起きる気配が無い。頬を叩いてみたが、反応なし。この様子じゃあナイフを刺しても起きなさそうだな…。
そう思って、半ば諦めかけていたとき、突然猫のように伸び、薄く目を開けてボーっとした表情で、俺を見つめる。そしてクシャクシャになり、所々ボタンの外れた自分のワイシャツを見ると、見る見る顔が真っ赤になって、
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」
と叫んだ。み、耳がキンキンする…。
「あ、あたいはな、なんてことを……知らない人とい、い、一線をこえてしまうなんてぇっ！」
は？何を言っているんだ、こいつ？
「うぅ、これじゃあお嫁に行けないよぉ…。もともとお嫁に行く気は無いけどさぁ…。どうしてくれるんですかぁ！？」
無いならそんなに悲しむ必要は無いだろ！
「あのさ、何か勘違いしているみたいだけど、別に何もしてないから。一線も越えてないから」
むしろ、襲われたのは俺のほうだし。
「ま、まさかあたいの方から襲っちゃった感じですか！？すみません、全然記憶が無くて…」
「だから、何も無かったって言ってるだろう！ただ俺は、君に幽霊と間違われて殺されそうになっただけだから」
俺にとっては、一線を越える並に一大事だったが。
「そ、そうなんですか？その発言に嘘偽りは無いんですね？」
だから無いって。というより、なんで裁判官みたいな聞き方をするんだよ？
「よかったぁ～。これでお嫁に行けるぅ。まああたいは行くつもりは無いんだけど」
そのネタ、さっきも聞いたから。

「それじゃあ何でこんな状態なんですか？」
自分の服装を整えながら尋ねる。
「だから、部室に入った途端、君に幽霊と間違われて襲われたんだよ。さっきからなんども言ってるだろ」
「あ、そういうことだったんですか。どうもすみませんでしたー」
棒読みで謝る。本当に謝る気があるのか？
「えっと、ところであなた誰ですか？」
こいつ、絶対俺を先輩だと思ってないな。
「俺は上野夏木。一応2年だ」
「えぇっ！？先輩だったんですか！背が低いから、てっきり同級生かと…」
背が低くて悪かったな！
「えっと、あたいは一年の鮎川梨王奈です。先日自然科学部に入部しました」
「へぇ、ちゃんと来るなんて偉いじゃねぇか」
「えへへ。あたい、オカルト的なことが大好きなんです！」
すると、急に目を輝かせて、小さな口でベラベラと語りだした。
「ポルターガイスト現象とか、ウィルオウィプスとか、ラップ音とか、ＵＦＯとか！！この自然科学部はオカルト部と呼ばれていると聞いたので、先輩方と語ろうと思って毎日来てるんですがぁ…誰にも会えないんですよね…」
「そりゃそうだよ」
「え？何でですか？」
「ここ、すごい気味が悪いだろう？だから入部してもあまり来ないんだ」
「じゃ、じゃあなぜ入部するんですか？」
「みんな大学の推薦もらうために入ってるんだよ。とりあえず部活に入っておけば、有利になるんだ。ちなみに俺もその一人だ」
でも中には真面目に入る人もいる。それがオカルトオタク（例えば部長）だから、自然科学部がオカルト部と言われるのだろう。

「その部長も、最近は受験勉強で全然来ないぞ」
「そんなぁ……。いっしょに幽霊に会いに行ってもらおうと思っていたのに…」
「き、君、幽霊に会いに行こうと思ってたの！？」
今の時代に幽霊を信じているなんて…。さすがの部長達も幽霊は信じていなかったぞ。（確か部長達は、黒魔法が専門だったような）
「はい、この学校出るんですよ。確か、女子寮三階の東側の倉庫とか、家庭科室とか…。七不思議だってありますよ！そしてその七不思議は全部その幽霊の仕業らしいですよぉ」
背筋がゾクッとする。あるんだ、七不思議…。
「あ、そうだ！せっかくですし、先輩が行きますか、幽霊に会いに」
「や、やだよ。何で自ら進んで幽霊に会いに行かなきゃならないんだよ！」
「ここであったのも何かの縁じゃないですかぁ。一緒に行きましょうよぉ～。あ、もしかして幽霊こわいんですかぁ？」
「そ、そんなわけないだろ！幽霊なんて、いないんだから、怖がる必要なんてないじゃねぇか」
「じゃあ決定～。今夜きっかり１１時、中庭に来て下さいねぇ。あ、外出禁止時間ですから、誰にも見つからないようにお願いしますよ。それではっ」
入り口においてあった謎の円盤を頭に担ぎ、すごい勢いで飛び出して行ってしまった。
あれ、あいつのだったのか……って、そんなことを考えている場合じゃないだろ、俺！あぁ～どうすりゃいいんだよぉ～！

Ghost.

「間違えないわね」
カスミは探偵のようにソファに深く座り込んで足を組み、超ドヤ顔で顎に指を当てて言う。
「人格の変化、幽霊への過激な執着、そして謎の円盤…。その梨王奈って子には間違えなく影が憑いているわ」
「ふーん。そうなんだ」
俺は適当に受け流して、大事に取っておいたゼリーを冷蔵庫に取りに行く。
「ちょっと夏木！ちゃんと聞いてるの！？」
「うん。聞いてるよ」
「嘘よ！ＵＦＯについての突っ込みがないじゃない！人の話はしっかり聞きなさいって親に習わなかったの！？」
残念ながら習ってませーん。ていうか習う親もいなかったし。そんなことよりゼリーだ！
俺が楽しみにしているゼリーは「ミラクルゼリー」と言って、ネーミングセンスこそは無いが、今とても人気なコンビニスイーツで、俺は毎月１５日に必ず買っていて一日冷やしてから食べている。多分、これを食べている瞬間だけが唯一俺が生きていてよかったと思える瞬間だろう。
冷蔵庫を開け、いつも隠している牛乳パックの裏を漁る。でもそこには何も無かった。おかしいな。いつもと違うところに隠したのかな？でも他のところも探すが見つからない。
買い忘れか？いやいや、そんなわけない。じゃあ泥棒が入って食べられたのか？いや、帰ってきた時部屋は荒らされた様子は無かった。ただカスミがスプーンでプルプルとした紫色の固体を食べていただけ…
「カスミぃぃぃぃ！！！」

慌ててリビングに戻ると、カスミがスプーンを口に加え、空になったカップの底を名残惜しそうに覗いていた。
「どうしたのよ、夏木？ゴキブリでもでた？」
やっぱり犯人はカスミか。まさか泥棒が家に住み着いているなんて、盲点だった。
あーあ、ちくしょう。もう空じゃねぇか。
「あ、もしかしてこのゼリーのこと？とってもおいしかったわ。また買ってきてね」
あぁ、俺の一ヶ月に一回の楽しみがぁ……。
「てめぇ、こないだからでかい態度とりやがって…俺のことをバカにするのもいい加減にしろよ！」
「だって夏木をいじるの、楽しいんだもん」
ふ、ふざけるなぁ！もうこうなったらボコボコにしてやる！
「あら、やれるものならやってみなさいよ」
ああ、やってやるさ。女だからって手加減しねぇぁらな！
俺は首締め技をかけようと後方に回り込み、片手でカスミの左手首をしっかりとつかんでからもう片方の手で細い首を締め上げる。なんだ、意外と弱いじゃないか。口ほどでもないな。
さらに技をかけようとすると、ニヤリと笑い、俺を見上げてギロリと睨む。
「…まったく、こんなので私をＫＯできるとでも思ったの？」
え？と思ったときにはもう遅かった。
「左手首の俺の手首を振りほどき、首を締め上げていた手を片手で持ち上がったかと思ったら、次の瞬間床に叩きつけられた。
おいおい嘘だろ！俺の体重は５０ｋｇ以上もあるんだぞ。それをあんな細い手で背負い投げするなんて…。
痛みを忘れて驚いていると、腹の上にカスミが座った。
「５０ｋｇだなんて私にとっては箸を持つ程度よ。ていうか軽すぎでしょ。ちゃんと食べてる？」
俺は太りにくい体質なんだよ。それよりどいてくれ…重い。

「まあ、重いだなんてレディに対して失礼よ。夏木がちゃんと話しを聞いてくれるならどいてあげる」
「わ、わかった。聞くからさ、マジでどいて。死ぬ…」
カスミはつまらなそうにしぶしぶどくと、またソファにドスンと座り込んだ。
「で？何を話していたんだっけ？」
「梨王奈ちゃんに影が憑いてるっていうことよ。だから早急に退治しなければならないわ」
「でもどうやって退治するんだ？」
ＲＰＧみたいに剣を使ったりするのか？それとも体術か？
「半分正解。確かに武器を使えば大抵の影は退治できるわ。でも梨王奈ちゃんくらい酷くなると武器だけじゃあ不可能よ。もちろん最終的には武器を使うけど」
足を組みかえ、グラスに入ったぶどうジュースを優雅に飲む。
「影にはレベルが１～５あるの。高ければ高いほど早急に退治する必要があるわ。１、２くらいは武器で退治できるけど、３以上は憑かれた原因を調べ、それを解決しなければならないわ。ちなみに梨王奈ちゃんは、話を聞く限りだとレベル３ね」
ふーん。じゃあ結構やばいんだな。
「そうよ。だから今夜、夏木には彼女と一緒に幽霊に会いに行ってもらうわ」
俺の肩をガシッと掴み迫ってくる。か、顔が、近いっ！
「何でそうなるんだよ！？」
「彼女が憑かれた理由は幽霊にありそうじゃない。さっきも言ったでしょ、彼女の幽霊への執着心は異常だって。きっと幽霊に会ってみれば何か手がかりが掴めるはずよ」
そ、そうかもしれないけど…それはちょっと…
「あれぇ？もしかして夏木は幽霊が怖いのぉ？」
まるで猫に食べられそうになっている鼠のように玄関に追い詰められる。

「そ、そんなわけないだろ！」
「じゃあ行けるわよね。大丈夫、幽霊なんてこの世に存在しないから。ああ、あとゼリーも買ってきてね」
気付くと、俺は財布といっしょに外に閉め出されていた。

「いや～、本当ありがとうございます。やっぱり先輩は良い人ですね」
俺たちは不気味に静まり返った真夜中の中庭を歩いていた。
まったく、その通りだ。ついさっき会ったばかりで、しかも初対面でいきなり襲われた後輩の変なお願いを聞いてやるなんて。
「でも何で財布なんか持ってるんですか？もしかしてお金で幽霊を釣る作戦ですか！？」
「そんなわけないだろ！ちょ、ちょっと帰りに夜食でも買っていこうかなって思ったんだよ」
「ふぉ～！じゃああたいにもおごってください！あたい、『ミラクルゼリー』がいいです」
お前もかよっ！絶対におごらないからな。これ以上今月出費を出すためにはいかないんだ。
「それより幽霊はどこに出るんだ？」
「あそこにある噴水の辺りに出るらしいんですけどぉ…」
梨王奈が指した噴水は、最近校長がヨーロッパから取り寄せたものだったので、月の光でピカピカ光るだけで幽霊どころか人の気配さえも無かった。
「本当に幽霊なんて出るのか？俺、まだ宿題終わってないから早く帰りたいんだけど」
「幽霊は絶対います！ここで一人も見た人がいるんですよ！！」
一人もって…それ、絶対見間違えだろ。くだらねぇ、俺はもう帰るぞ。
「あぁっ、先輩っ！お淑やかな美少女を真夜中の学校に置いて行く

なんて酷いです！残虐です！」
「お前のどこがお淑やか美少女だ！幽霊なんか存在しないのに、こんなことに付き合っていられるか」
そう言って引き返そうとした時だった。
突然校舎の方からガラスが割れるような音がしたかと思うと、今度は指を鳴らすような音が聞こえてきた。
「い、いったい何が起きてるんだよ！？」
「この音…ラップ音です！心霊現象ですよ、先輩っ！」
し、心霊現象だって！？じゃあゆ、幽霊が本当に現れたのか？」すると噴水が浮かび上がり、空中でふわふわと回転し始めた。おいおい、なんであんな重いものが浮かび上がるんだよ！？
「ポルターガイスト現象ですよ！！１６年間生きてきたけど、初めて見ました！」
梨王奈がわなわな震えながら俺にしがみついてくる。二人で震えていると、どこからか笑い声が聞こえてきて、とうとう浮き上がっている噴水の下に、真っ白い肌のなんだか薄い少女が現れた。美しいソプラノボイスが真夜中の学校に響き渡る。
少女はひたひたとこっちに近づいてくる。
「も、もう限界ですぅ…あたい、帰りますっ！！」
「お、おい、ちょっと待てよ！」
しかしもう底には梨王奈の姿はなかった。なんだよ、あいつ。人に付き合わせておいて一人で逃げ出すなんて！
とりあえず俺も早いところ逃げよう…！…って、あれ？足が動かない。というより力が入らない！まさか俺、腰を抜かしたのか…？
しかし容赦なく（信じたくない）幽霊は俺に近づいてくる。俺、殺されるのか？殺してくれるのは本望だが、俺は幽霊なんて非科学的なものに殺されてしまうのか…。せめて人間に殺されたかったな。
覚悟を決め、呆然としていた時だった。
視界を何かが横切り、ドンという音がして砂煙が上がりすぐに悲鳴が聞こえた。やがて聞こえてきたのは幽霊ではなく悪魔の声だった。

「まったく、幽霊なんて存在しないって言ったでしょう。なのに腰を抜かして、しかも明後日の方向見てるし…。男なのに情けなさすぎよ」
「か、カスミ！何でお前がこんなところにいるんだよ！」
「一人で暇だったし、へっぴり腰の夏木がどうしたか気になったから来てみたのよ。そうしたら幽霊に腰を抜かしてるんだもの。まったく、呆れちゃったわ」
カスミは砂煙の向こうで何かを縛り上げてから、ゆっくり歩いてきた。
「一応この子は縛っておいたわ。まあもう悪いことはしないだろうけど」
落ちた時半壊した噴水をバックに、幽霊の少女がしょんぼり座っている。
「そういえばさっき幽霊なんて存在しないなんて言ってたけど、それじゃあいったいこいつはなんなんだ？
「影よ。でも夢の世界で生まれたんじゃ無くて、昔は人間で、願いを叶えすぎて体を奪われちゃったのでしょう。世間一般で言う幽霊は、大体この子と同じようなタイプの影なのよ」
「…な、なによ…人間に味方しているあなたに私たちの何が分かるって言うのよ…」
ブツブツと顔を歪めながら呟く。
「あなたも辛かったのでしょうね。でも今楽にしてあげるから」
おそらく影を退治するための拳銃を取り出すと、突然目を光らせ、なんとガブリとカスミの腕に噛み付いた。
「いったぁぁぁぁぃぃ！！！！」
「誰が退治されるものですか！あたしは願いを叶えるまでは絶対に消えないんだから！」
両腕を縛られているにも関わらず、俊敏な動きで俺らから距離をとる。
「な、何をするのよ！痛いじゃない！」

「あたしを退治しようとするからいけないんでしょ！」
まるで猫のケンカのように、毛を逆立てて唸りあっている。
「二人ともやめろよ。で、お前の願いってなんなんだ？」
「梨王奈と話がしたいの。最近様子がおかしいでしょ。だから気になって…」
「君、梨王奈と知り合いなの！？」
「ええそうよ。中学からの親友よ。そして…」
彼女は整えられる範囲で髪の毛を整えると、切なそうにぽつりと呟いた。
「そしてあたしが梨王奈を……殺したの」

狂い始めるなにか

「殺したって…どういうことだよ！？」
俺はつかめない幽霊の胸倉につかみかかる。
「そのまんまの意味よ。あたしが梨王奈を殺したの」
大きくため息を吐いて俺らから目を逸らす。
「じゃあ死んでいるのか？」
「まさか。ちゃんと生きているよ。あたしみたいに透けてなかったでしょ？」
「じゃあ何で生きているんだよ？」
「…それはあたしの口からは言えない。梨王奈に聞いて。まあ絶対に答えられないだろうけどね。それよりさ、この手首を縛っているやつ取ってくれないかな。もう何も悪いことしないし、逃げないからさ」
カスミは面倒くさそうに彼女の手首を縛っていたロープを取る。
「そういえば幽霊なのに何で縛れたんだ？」
実体が無いんだから、縛れないはずだろう。
「影を拘束する用に魔法をかけてあるのよ。ちなみに伸びたり縮んだりもするし、大きくなったり小さくなったりもするわ」
そう言ってロープをポケットにしまった。魔法ってすごいんだな。
「夏木は影同然なんだから、本当は使えるのよ」
「よっこらしょ」と年寄り臭い言葉を呟きながら立ち上がる。
「ねえ、一つ聞いてもいいかしら？」
「何よ？くだらないこと聞いても答えないよ」
「もちろんそんなことは聞かないわ。あなたは梨王奈ちゃんと話がしたいのよね？ならばどうして自分から話しに行かないの？梨王奈ちゃんにだって影は憑いてるんだから、影であるあなたの姿は見えるはずよ」
そういえば、影は普通の人には見えないけど、影が憑いてる人なら

見ることが出来るんだっけ。いつだかカスミが言ってたな。
影は苦しそうに顔を歪め、重そうに口を開いた。
「…あたしから梨王奈に会いに行くことはできないの」
「どうしてだよ？親友なんだろ？」
「確かにそうだったよ。でもそんなの昔の話で、今は違う。梨王奈は私を恨んでる。憎んでる。梨王奈はとても弱い子。だからあたしが会いに行ったら、壊れちゃう」
そう言うとうつむき、もう何も聞けなくなってしまった。
「と、ところでさ…こいつどうするんだ？」
「こいつ呼ばわりしないで！あたしには『ヒトミ』っていう超可愛い名前があるんだから」
さっきまでとは打って変わって、今にも噛み付きそうだ。
「そうね……梨王奈ちゃんがおかしくなった原因を取り除く手伝いをしてくれるなら、梨王奈ちゃんと話ができるようになんとかしてあげても構わないわよ」
「本当！？わ、わかった、何でも協力する！だからあたしの願いを叶えて！」
神にでもすがりつくようにカスミにしがみつく。そんなに梨王奈と話がしたいのだろうか。でも梨王奈と話したい理由は「最近様子がおかしいから」だろ。それは影が憑いているからであって、影を祓えば話す必要もなくなるようなきもするんだが…
「わ、わかったわ。だから落ち着いて。でも絶対に梨王奈ちゃんに害は与えちゃダメよ。」
「もちろん！それで、あたしはどうすればいいの？」
「そうねぇ…いつあなたが必要になるか分からないし、とりあえず夏木の家に来なさいよ」
「お、おいちょっと待て！それってつまり、俺の家にそいつを居候させるってことか！？」
「そういうことになるわね。別にいいじゃない。あなたの家広いんだし」

そういうことじゃなくてなぁ…
「確か、狭いけどもう一部屋あったはずよ。そこを使うといいわ」
おい、勝手に話を進めるな！俺の家だぞ！
「そうね…そろそろここも飽きてきたし、あなたの部屋にも興味あるから、お言葉に甘えさせてもらっちゃおうかな」
「じゃあ決定。さあ夏木、三人分のミラクルゼリーを買って帰るわよ」

「おいおい上野、大丈夫か？」
放課後、死んだように机に突っ伏していたら河村に心配されてしまった。
「うーん、ちょっとダメかも」
「そうか…。色々大変だろうけど頑張れよ。なんかあったら相談にも乗るぜ。もちろんお代は頂くけどな」
調子よく俺の肩をポンッと叩くと、河村は教室を出て行った。
結局昨日はあの後、なけなしの小遣いで三人分のミラクルゼリー（計８７０円）を買う破目になり、夜は女子トークがうるさくてほとんど眠れず、挙句の果てに例の変態後輩に呼び出され（しかも、果たし状のように矢に手紙が縛り付けられ、机に刺さっていた）ている。
こんなことになるくらいだったら、あの時カスミの話なんか聞かないで、普通に、毎日絶望しながら生きていく方がずっとマシだった。
俺はのっそりと立ち上がり、梨王奈のいる中庭へ向かった。

中庭はいつものようににぎわってはいなかった。菜ノ葉いわく、幽霊が夜の間に噴水を壊したという噂が流れているらしいから、そのせいだろう。まあ事実なんだけど。
「せんぱーいっ！こっちでーす！」

梨王奈は中庭にあるベンチではなく、木の影から大きく手を振っていた。
「何でそんなところにいるんだよ。隠れてないでそこのベンチに行こうぜ」
「ダメですよ！誰かに計画を聞かれたらどうするんですか！それに、あたいみたいな美少女と先輩がいっしょにいることが周りに知れたら大変なことになりますよ」
聞く人もいないと思うし、俺らがいっしょにいても大変なことにはならないから。
「で、今日は何の用？」
「あぁっ、そうでした。そ、その、昨日のことを謝ろうと思って」
そう言うと、正座して地面に頭をつけて土下座する。
「本当に申し訳ありませんでしたっ！」
「お、おい、頭上げろって！」
いくら見ている人がいないとはいえ、かなり恥ずかしい。
「そういうわけにはいきません。先輩が幽霊を怖がっているのを知りながらあたいは逃げ出しました。こんなの男の恥です。あたい、腹切らせていただきあす」
どこで手に入れたのか、小刀を取り出し腹に当てる。
「ちょ、ちょっと待てって。俺、幽霊なんか怖くないから。ていうかお前、男じゃないだろ！だから早まるなよ！」
いくら影が憑いていて（おそらく）死なないとはいえ、学校の真ん中で切腹されては困る。
「本当ですか？」
「ああ、すっきりまるまる全然気にしてないよ」
すると梨王奈の表情がぱぁっと明るくなり、小刀を投げ捨て俺に飛びついてきた。
「やっぱり先輩は優しいですねぇ」
「まあな」と適当に返事する。本当はすごい気にしているんだが…
「そんな超優しい先輩にお願いがあります」

目をキラキラ輝かせながら俺を見上げる。なんだか嫌な予感がする…
「今夜、もう一度幽霊に会いに行きませんか？」
は？こいつ何言ってるんだ？
「今夜こそ会える気がするんです！大丈夫です、今夜はしっかりにんにくとか十字架を持って行きますから」
にんにくと十字架って…それ、吸血鬼だろ。
「そ、そうかもしれませんけど…きっと幽霊にも効きますよ！」
「あとお塩といわしも持っていかなきゃぁ」とか、目を輝かせながらブツブツ呟やいている。
「悪いけど、今夜は絶対に行かないから」
「えぇっ！どうしてですか！？」
眉を八の字に下げて、しょぼくれている。
「もうそんなことに付き合うのはごめんだ。どうせ幽霊なんか現われやしないんだし」
そう、幽霊は―ヒトミは絶対に現れない。待っているんじゃなくて、お前が会いに行かない限り。
「現れますよ、絶対！」
「その確証はどこにあるんだよ！？そもそも、どうしてお前はそんなに幽霊を求めるんだ！？」
そう言い放った瞬間、梨王奈の動きが止まった。まるで時が止まったかのように。そしてだんだん唇が震えだし、瞳が揺れだす。そして震えは全身に伝染する。
「ちがう……幽霊は……存在する……夢に…いたから…あいつは…いる…」
「お、おい、どうしたんだよ！？」
震えはますます大きくなり、たっていられず、とうとう地面に膝をついた。
「いらなかったのに……どうして…許せない…恨めしい…憎い…憎い、憎い、憎い！！」
「お、おい、しっかりしろよ！」

いくら頬を叩いても震えは止まらず、ブツブツ何かを唱えながら目を泳がせたままだ。
「…どう…し…て……」
すると、突然梨王奈の華奢な体が傾き、俺の腕の中に沈んでいった。
「おい梨王奈、しっかりしろよ梨王奈、梨王奈！！」

憎いよ。恨めしいよ。私もあなたのことが憎くて恨めしくてたまらないよ。

そんな声が、聞こえた気がした。

この世界はわからないことだらけで

いつの間にか桜は散り、葉はすっかり緑に色づいていた。外では甲子園に向けてだろうか、球児たちが夕日をバックに一生懸命走り込みをしている。
俺はその光景を保健室の窓から眺めながら、梨王奈が目覚めるのを待っていた。
西日が彼女の顔を照らし、赤く染める。でも彼女は死んだように眠ったままだ。このまま目覚めなかったらどうしようとまで思えてくるほどだ。
いったいこいつに何が起きたんだ？幽霊の存在を否定されたのがそんなにいやだったのか？でも普通それだけでこんな風にならないだろう。やっぱり影の仕業なんだろうか。
「ええ、その通りよ」
「わぁっ！」
突然背後から声が聞こえたものだから、パイプ椅子から転げ落ちそうになってしまった。
「な、なんだ、カスミか…。驚かすなよな…って、何でお前がここにいるんだよ？」
「梨王奈ちゃんが発狂して気絶したって瞳から聞いて、慌てて来たのよ」
カスミが顎をしゃくったほうを見ると、ヒトミがベッドに横たわる梨王奈の抜け殻を呆然と見つめていた。
やがて少し屈み、梨王奈の腕に触れようとして手を引っ込める。
「こんなに痩せちゃって。肌もガサガサに荒れちゃって。一人で頑張って幽霊（わたし）を探してくれていたのね？」
ヒトミはパイプ椅子に座り、梨王奈の顔を見つめる。
「そういえば、梨王奈がこうなったのは影の仕業なんだよな？」
「ええ。仕業と言うか…影が憑いた影響で精神が不安定になってい

ることで起きたんでしょうね。取り憑かれた人――特に一番精神が不安定になる、影がレベル３からレベル４に上がるときによく起きるのよ」
「それって早く退治したほうがいいってことだよな」
「もちろん。レベル４になると更に退治するのが大変になるし、彼女の身も危ないわ。下手したら影に身体を取られてヒトミのような状態になっちゃうかもしれないし。だからねえ、ヒトミ。あなたは彼女の親友だったのよね？いったい彼女の過去になにがあったの？」
ヒトミは梨王奈の顔を見つめたまま顔を上げない。
「さっきも言ったけれど、彼女を早急に助けなきゃいけないの。そのためには彼女の過去を知る必要があるの！あなたも彼女を助けたいんでしょう？」
ヒトミは梨王奈のふわふわの猫っ毛にふれようとするが、再び手を引っ込める。そして顔を上げずに重そうな口を開いた。
「…確かに助けたい。でも前にも言ったけど、あたしの口からは言えないの。梨王奈が思い出すまでは」
「思い出すまでって…まさか梨王奈ちゃんには昔の記憶が無いの？」
ヒトミが静かにうなずく。そうか、こいつも俺と同じなのか。
「じゃあお前が教えてあげればいいじゃないか」
教えられるなら…教えてもらえるなら、きっとこいつも教えて欲しいはずだ。
「そんなこと、できるわけないじゃない！それに梨王奈はあんたとは違うのよ！第一、もしそんなことしたら…」
「そんなことしたらどうなるんだよ？」
「…なんでもない」
ヒトミはまたうつむいてしまった。
「まあ確かに無理に思い出させるのは賛成できないわ。もしかしたらまたさっきのようになってしまうかもしれないし、最悪の場合精神を壊しかねないわ」
「じゃあどうするんだよ？こいつの記憶が分からなきゃ影を祓えな

いんだろ」
「ええ。本当はヒトミから聞き出せればよかったけど……話してくれそうにないし、こうなったら強行手段に出るしかないわね。人間のあなたもいるし、こんな早いうちにこの方法は使いたくなかったんだけど…」
「どんな方法なんだよ？」
カスミが相当ためらってることは、そんなに危ない方法なんだろうか。
「梨王奈ちゃんの夢の中に入るわよ」
「ゆ、夢の中に入る！？」
「ええ。影が住んでいるのは夢の中よ。だから少し荒療治だけど、夢の中に入って直接影を退治するの」
「退治するって…どうやって？」
「基本的には武器を使うわ。魔法で武器を出して戦うのよ。まだ魔法なんて使ったことないでしょうけど、私が全力でサポートするし、あなたにはある程度才能があるから大丈夫よ」
大丈夫って…プロレスを趣味程度に知っているだけで、実戦経験はほぼ０の俺が、使ったことのない武器で勝てるわけ無いだろ！
「そんなに心配することはないわよ。この私に挑む勇気があるんだから」
それはお前が弱いと思っていたから挑んだだけで、強いって知ってたら絶対挑まなかったよ！
「もう、つべこべ言わずにさっさと行くわよ！さあ、早く梨王奈ちゃんにキスしなさい！」
え、今なんて言った？
「だから、梨王奈ちゃんにさっさとキスしなさいって言ってるのよ」
「は、はぁぁぁぁあ！！？？」
カスミの口が放った爆弾に、思わず大声で叫んでしまった。まあこんなこと突然言われて叫ばない人間なんていないだろうけど。
俺らの話を聞いていたヒトミも口をあんぐりと開けている。

「な、何で、俺がこんなへ、変体女と、キ、キスしなきゃいけないんだよ！！」
「しょうがないじゃない。彼女の夢の中に入ることは彼女の中に入るってことなのよ。だから、その方法が一番楽なの」
「ま、魔法とかじゃあ入れないのか？」
「無理ね。取り憑かれていない人は魔法で入れるけど、取り憑かれている人は、影が自分を守るために取り憑いた人に魔法を跳ね返す微弱なバリアのようなものを張るのよ。だから魔法を使わないで入る方法は、それが一番手っ取り早くて楽なの」
全然楽じゃないだろ！
「そ、そういうお前はどうやって入るんだよ？」
脳内に（何故か）ツインテールを解いたカスミが、梨王奈に口付けする映像がよぎる。
「私は影だから、夢の中には自由に出入りできるのよ。変な想像とかしないでよ」
なんだ、違うのか…って何がっかりしてるんだよ！
「さあ、さっさとキスしなさい。一瞬のことじゃない」
「絶っっ対に嫌だ！一瞬のことだろうと絶対にしないからな。そんなことするくらいだったら、死んだ方がよっぽどマシだ！！」
死ねなのに何いってるんだよ、俺。
言ってから自分のバカさに気付く。そしてその言葉がどれほど愚かだったことか。
「あらそう。じゃあちょっと面倒くさいけど死んでもらいましょうか？」
「え…」
しかし反論する前に、その言葉を理解する前に、俺はカスミの袖に仕込んであったナイフに胸を一突きされた。
血が徐々に流れ出すように。雑巾の端を水につけ、それがじわじわと雑巾を濡らしていくように意識が遠のいていく。
「またあとで会いましょう」

最後に聞こえた意味深な台詞(せりふ)が俺の中に響く。

それがどこか懐かしくて。寂しくて。切なくて。

Fantasy of fantasy?

「ねえ夏木、『影』って知ってる？」
一向に泣き止みそうも無い空の下、「死神」の墓の前で幼い俺に夢お姉ちゃんが背中を向けて話しかける。
俺が「ううん、知らない」と答えると、「そう…」と少し残念そうにため息を吐く。
「影はね、人間の願いを叶えてくれるのよ。でもね、同時に人間を…世界を滅ぼすものでもあるの」
夢お姉ちゃんは振り向くと、俺の背に合うようにしゃがみこみ優しい、そしてどこか恐ろしい笑顔で語りかける。
「だからお姉ちゃんはね、あなたに影をプレゼントしようと思うの」
夢お姉ちゃんが俺の肩を死人のように冷たい手で捕まえる。腹の底から込み上げてきて、あわてて逃げようとするが、まったく動けない。
そしてお姉ちゃんは腕を振り上げると、俺の腹にそれを突き刺した。あまりの痛さに声にならないうめき声を上げる。
「大丈夫、今はちょっと痛いけどすぐに痛くなくなるわ。ただし、あなたが大人になるにつれ、また痛くなってくるの。今よりもっともっと痛いわ。そしてそれは永遠に消えること無いとてもつらいものよ。でも私はそれより何十倍もつらくて苦しい思いをしてきたの」
血が滴り落ちて、黒い地面を赤く染める。
「どう…し…て……こんなこと…する…の…？」
お姉ちゃんはしばらく黙り込んだ後、ようやく腕を引き抜き、俺の小さな身体を地面に捨てた。
そして軽蔑の目で見下し、言い放った。
「まだわからないの？私はあなたのこと恨んでいるからよ」

「うわっ！」
自分の奇声と激しい脇腹の痛みで飛び起きる。
「ようやく目が覚めたようね」
見上げると、カスミが俺を見下ろしていた。それがどこか夢お姉ちゃんと重なって。
「どうしてあとずさるのよ？私、何かしたかしら？」
「い、いや、そういうわけじゃなくて…」
俺はさっき見た夢のことを話す。
「そう…まさかあなたのお姉さんが影をあなたに取り憑かせたなんて予想外だったわ。でもどうしてそんなにあなたを恨んでいたのかしら。それに、夏木より何十倍苦しい思いをしてきたっていうのも気になるわね。いったいあなた、何したの？」
何もしてねーよ！
「まあ少し思い出せてよかったじゃない。影退治の第一歩よ。それに、無事に梨王奈ちゃんの夢の中にも入れたし」
夢？そうだ、俺たちは梨王奈の夢に入ろうとしていて、それで…
「あぁっ！お前、さっきはよくも殺してくれたな！」
「仕方ないじゃない。キスするなら死んだ方がマシだって言ったから…」
「だからって、本当に殺すことはないじゃないか！」
「だって、キス以外の方法って、死ぬ――つまり肉体と精神を切り離して、夢の中に入れる影の憑いた精神だけを私が誘導するしかなかったのよ」
そ、そうなのか…じゃあ次、もしも誰かの夢の中に入るようなことがあったら、また殺されるのか…。
「いいじゃない。あなたよく自殺しているわけだし。そんなことより、ほら、見てみなさいよ。とても綺麗な夢よ」
カスミに言われて辺りを見ると、宇宙のような世界が広がっていた。あたり一面様々な色に輝く星が散りばめられ、遠くの方には土星や地球などの惑星も見える。更にはＵＦＯや宇宙人のようなものも飛

んでいたりしている。ちなみに、俺らが今立っているのは月のようだ。
「ここが夢なのか…。すごい広いし、宇宙みたいなところだな」
「夢は人それぞれよ。性格や好きな物、心の広さとかでデザインや広さが決まってくるわ。梨王奈ちゃんはＵＦＯとか宇宙人が好きだから、こういうデザインになってるんじゃないかしら」
じゃあ俺の夢は違うデザインなのか…。いったいどんなデザインなんだろう？
「気になるなら今度見てきてあげましょうか？まあ、どうせ狭くてろくでもないデザインなんでしょうけど」
「ろ、ろくでもないなんて、見てみなきゃわからねぇだろ！」
「あなたの性格からしてだいたい予想がつくわよ。それにしても本当に綺麗な夢ね。今までいろんな夢を見てきたけど、こんなに綺麗な夢は久しぶりよ。普通影に取り憑かれたらもっと薄汚くなってしまうのに」
カスミは目を輝かせて辺りを見回す。こいつもしかして夢のフェティシストなのか？それともこの景色に感動しない俺が変なのか？
「それよりさ、俺たち影を退治しにここに来たんだろう？探さなくていいのかよ」
「ああ、そうだったわね。あまりにも夢が綺麗だったものだからすっかり忘れてたわ。じゃあとりあえず、火星のほうにでも行ってみましょうか」
言われるままに月面の端まで引きずられていくが、そこから暗黒の世界に踏み出そうとしてためらう。今俺らは月にいるから立てているけど、宇宙空間では立てないで落っこちてしまうんじゃないのか？
「心配しすぎよ。ちゃんと立てるわ。夢はね、部屋のようなものなのよ。つまりこういう景色はあくまでも壁紙よ。だから穴が開いてない限り落ちることは無いわ」
そうなのか。でもいくら落ちないとはいえ、白い地面から真っ暗な空間に踏み出すのは怖い。

「まったく、この臆病者っ！」
「わあぁっ！」
カスミが俺の身体を闇の中に突き飛ばす。
「と、突然押すなよ！危ねーじゃねぇか！」
「しょうがないじゃない。あなたがなかなか踏み出そうとしないから…。それともまだ怖いのかなぁ、お姉さんが手を引いてあげましょうか、夏木くぅん？」
「だ、誰がお前なんかにっ！」
俺は赤い星を目指して一気に走る。
「あんまり走ると後で疲れるわよ。意外と遠いんだから」
何言ってるんだよ。どこが遠いんだ。５０ｍくらいしかねえじゃねぇか。

でもやっぱりカスミの言葉は正しくて

もう３０分近く歩いたのにまだ着かなかった。いくらあるいても火星は数十メートル以上先にある。
「だから言ったじゃない。もちろん実際の月と火星の距離あるわけじゃないけど、元々の距離が決して近いわけじゃないんだから、遠いに決まってるじゃない」
後ろから悠々とカスミが歩いてくる。
そうだった。この夢は宇宙なんだった。宇宙的に見れば火星と付きは驚くほど遠いわけじゃないんだろうけど、人間からすればすごい距離になる。
「気長に行きましょうよ。そのうち影も見つかるわ」
気長って言ったって、もうへとへとだよ。俺は地面に座りこみ、少し休憩を取る。
待っていればそのうち影の方から出てくるだろ。いくら広いと言ったって、所詮一つの部屋なんだから。

その選択がいかに愚かだったことか。

「夏木っ、後ろっ！！」

カスミが突然目を見開き、青ざめた顔で叫ぶ。

「はぁ？」

振り返ると、宇宙人のようなタコ型の真っ黒なモンスターが長い触手のようなものを振り上げて、そしてそれを俺目掛けて振り下ろす。

「うわっ！！」

攻撃を避けきれず、弾き飛ばされてそのまま地面に身体を叩きつけられる。特に左腕を強く打ったらしく血まみれだった。骨は折れてないようだけど、なかなか痛みが引かないし血も止まらない。

おかしい。いつもだったらこんなことないのに。いつだかリストカットしたときだってこんな風にはならなかった。

「夏木、避けてっ！」

カスミの声で顔を上げた瞬間、バナナっぽい何かが目の前に転がってきて、眩しい光を放ったと思うと爆発した。直撃こそしなかったが、爆風で数メートル飛ばされる。

「まったく、何やってるのよ！ほら腕を貸しなさい！」

煙の中から突然現れたと思いきや、有無を言わせずに左腕を掴まれ叫びそうになったが、みるみるうちに痛みが引き、血も止まった。

「魔法を使ったのよ。ただし時間制限があって、特に夢の中（ここ）だと10分程度しか持たないわ。だからその前に片付けるわよ！」

「な、なあ、どうして血が止まらなかったんだよ？俺は不死身なんだろ？」

「確かにそうね。でもそれは人間や物に対してだけ。影や魔法で作られた物に対しては無効よ。つまりあのタコ型モンスターは影ってこと。だから、今ここではあなたはただの非力な人間。ただし、魔法の使えるね」

それだけ言い残すと、さっきの爆発で転んで起き上がれずにもがいている影に向き直り、片手に拳銃、もう一方の手でさっきのバナナ

そっくりな爆弾を握り締めて戦闘態勢を取ると、目にも止まらぬ早瀬で行ってしまった。
ただの非力な人間…俺は不死身じゃない…
それが頭の中を駆け巡る。今まで味わったことの無い「人間」という感覚。

うれしいはずなのに、それはどこか不気味で。

「ほら、いつまでもボーっと突っ立ってないで、さっさと魔法使って武器出して、戦いなさいよ！」
ぶ、武器？魔法を使って武器を出すって、どうやるんだよ！？
「願うのよ、自分の影に！そうすれば影が魔法を使って武器を出してくれるわ！ただし、具体的に願いなさいよ！」
拳銃で触手と必死に応戦しながら叫ぶ。願うって言ったって…
でもこれ以上何か言っても伝わりそうにもなかったので、よく分からないけど頭の中でＲＰＧに出てきそうな適当な武器を思い浮かべ、自分の中にいる得体の知れない奴に願う。

それはずっと忌み嫌っていた奴で。

でも今お前に頼る。こうすることはいつかお前を俺の中から追い出すことに繋がる。それでも、それでもどうか…。
すると突然腕がずしんと重くなった。念じるのをやめてそっと目を開けると、俺の両手の中に巨大な剣の柄があった。
俺の背よりもでかそうな銀色に輝く剣。俺はその柄をしっかり握り締めて持ち上げようとする。もう少しそいつを何とかしておけよ、カスミ。俺も今そっちに…
あれ？動けないぞ。なんでだ？もう一度柄をしっかり握り締めて立ち上がろうとするが、立ち上がれない。というか、剣が持ち上がらない！

な、なんでだよ！勇者達はこういうものを軽々と持って戦ってたぞ！
「あなた馬鹿？ＲＰＧとかの勇者は所詮ゲームの中の人間よ。だから、いくらか弱そうな女勇者でも、どんな剣でも持ち上げられるの。つまり、勇者が使ってるようなかっこよくてごっつい武器は軽そうに見えて、本当はすっごく重いのよ」
言われてみればそうだよな…。あんなでかい剣が重くないわけがない。
畜生、もう一回新しい武器を…
「そうだ、言い忘れてたけど、一度出した武器は絶対に取り替えられないから」
何度倒しても一向に減らない無数の影の触手に舌打ちし、それでもそれをぶち抜きながら何気なく言う。
な、なんだって！じゃあ俺はこれから先ずっと、この重たい武器で戦わなきゃいけないのかよ！
しぶしぶもう一度持ち上げようとしてみるが、びくともしない。畜生、どうすれば…
「夏木、後ろっ！」
振り返ると、巨大な触手が迫ってきていた。くっそぉ、こいつが軽くなればいいのに…
死を覚悟し、それでも渾身の力を振り絞って持ち上げようとすると、ヒョイッと剣が持ち上がり、そのまま勢いで振り下ろすと見事触手を真っ二つに切り裂いた。
カスミが指を立ててナイスというサインを送ると、再び影への銃撃を開始する。
い、今のはなんだったんだ？さっきまでびくともしなかったのに、どうしていきなり軽々しく持ち上がったんだよ？
まさかさっき「軽くなればいいのに」と思ったのを、影が勝手に叶えたのか？
そんなことをボーっと考えていると、カスミに「さっさと応戦しなさいよ！」と怒鳴られてしまいました。まあ結果的に戦えるように

なったんだし、いいか。
剣の柄をしっかり握り締め、影に向かって走り、ＲＰＧの勇者を思い出しながらヤケクソに剣を振る。
肉を切る気持ち悪い音とそのたびに上がる気色悪い鳴き声のせいで、吐き気が込み上げてくる。１８禁の超グロテスクなＲＰＧやゾンビゲームはできたのにな。
それでも吐き気を堪えながら必死に戦うが、とうとう視界がグニャリと歪み立っていられなくなって膝をついてしまった。
もうダメだ。限界だ。我慢していた酸っぱい物を吐き出す。全てを吐き出し、立ち上がろうとするけど目眩が酷くて立ち上がれない。
「夏木、前っ！」
カスミの叫び声で顔を上げると、俺が動けなくなっていたのに気づいた影が、にゅるにゅる気持ち悪い足を動かしながら迫ってきていた。
力を振り絞ってふらふらと立ち上がり逃げようとするが、足が絡まってうまく歩けない。
畜生、動けよ俺の足！それとは裏腹に、ますます足が絡み、とうとう転んでしまった。
「っく、間に合わない！」
まずい、食われる！
目をギュッとつぶった瞬間、グシャッと肉がつぶれる音がした。そして続けざまに肉に刃物が突き刺さる音がする。
なのにまったく痛みがない。また胃から酸っぱい物が込み上げてくるだけだ。
恐る恐る目を開けると、俺の前にいたのは影でもカスミでもなくて。
「すみません、夏木さん。遅くなってしまって」
「…寄り道してた、ごめん」
真っ白いふりふりのレースやふわふわのリボンの着いている黒いメイド服を身にまとった、サイドテールと背の低い猫っ毛の…紛れもないメイドだった。

「よかった、まだ首はついているようですね」
鉈を持った猫っ毛のメイドがさりげなく恐ろしいことを言う。可愛い顔して物騒なこと言うなよ。
「…カスミ様が無事ならそれでいい」
デッキブラシを持ったサイドテールのメイドがぼそりと呟く。おい、俺はどうでもいいのか？
「おっそいわよ、二人とも！！あと少しで夏木が食べられちゃうところだったじゃない」
カスミが影をバナナ型爆弾で退かせて、俺らの前に軽やかに現れる。
「…すみません、調査に時間がかかってしまいました」
メイド二人がカスミの前に跪く。おいおい、そんなに忠誠を誓うような奴なのか、こいつは？
「と、ところでそのメイドは誰なんだ？」
「そっか、あなたは初対面だったわね。二人は私のメイドで、金髪のサイドテールのほうがメイルで、小さい猫っ毛の方がフェルン＝ゼーアーよ。こないだ言ったでしょ、強力な助っ人がいるって」
ああ、それがその二人だったのか。確かにさっきの戦いぶりを見ればすごい強そうだ。
「よろしくねぇ、夏木くん。あ、あたしのことはフェルンでいいから。ていうか、それ以外は許さない」
「ああ、うん。よろしく。さっきはありがとね」
「いえいえ～」と軽く流し、身体のサイズに合わない鉈を構える。
メイルとかいうメイドにも挨拶した方がいいんだろうな。さっき助けてもらったわけだし。
そう思って近づこうとしたが、俺を睨みつけ、どう考えても話しかけられそうにない。でもここは勇気を振り絞って…
「な、なあ…」

「…別にあんたを助けたわけじゃない」
「え？」
「…何度も言わせないで。さっきはあんたを助けたわけじゃない。カスミ様の命令だから助けた。だから礼を言われる筋合いはない。そして…」
デッキブラシを俺の眉間につきつけ言い放つ。
「…ボクには極力近づくな」
最後にキリッと睨みつけると、カスミの元に駆け寄りさっきとは打って変わった甘い声で話し始める。
な、なんなんだよ、あいつ！こっちがせっかく仲良くなろうとしたのに、あんなに不細工な態度とりやがって！なのにカスミに対するあの態度はなんだよ！近づくな？お前みたいな奴、誰が近づくか！
「ごめんねぇ、夏木くん。メイルは人間が苦手なの。しかもカスミさんに首っ丈で、最近夏木くんの事ばかりカスミさんが気にしているから嫉妬しているの」
首っ丈って…あいつ百合なのか？
「まぁいろいろあるんですよぉ。あっ…」
可愛らしくウインクした瞬間、突然爆発音がして彼女が炎に包まれた。
慌てて振り返ると、爆弾を食らってさっきまで起き上がれずにもがいていた影が、不気味な声で笑いながらカスミのバナナ型爆弾を握ってきた。
な、何であいつがあれを持っているんだよ！？
「あいつの…得意な魔法…は…コピー…魔法…」
「フェルン！？大丈夫だったのか？」
「大…丈夫ですぅ…直前で爆弾を真っ二つにしてやりましたんでぇ…」
可愛らしいふわふわの猫っ毛が爆風でぐしゃぐしゃで体は傷だらけなのに、どこが大丈夫なんだよ！？
「このくらいなんてことないです…。夏木くんも気をつけて下さい

ね。奴はさっきも言ったとおり、魔法をコピーする魔法、コピー魔法が得意みたいですから」
魔法に得意不得意なんてあるのか。そういうところは人間と同じなんだな。
「あれ？ちょっと待てよ。あいつは魔法をコピーするのが得意なんだよな？」
「うん。それがどうかしたの？」
「さっきあいつが投げたのって、カスミの爆弾だろう？爆弾は魔法じゃないだろ」
「ああ、あれは実は爆弾じゃないんです」
「え？」
「魔法をとある形――カスミさんの場合はバナナに凝縮して、実体化しただけのただのエネルギー弾なんです。それがカスミさんの得意魔法の一つかな？」
一つって…他にも得意魔法あるのかよ？
「もちろん。あたしが知ってる限りだと、分身とか小さくなったりとか。まだまだいっぱいありますよ」
す、すごいんだな、あいつ。
「はい。カスミさんは天才ですから」
天才…確かに頭は悪くなさそうだけど、天才には見えない…。
「フェルン、大丈夫だった！？」
影に銃撃を続けながらカスミがフェルンの元に駆け寄ってくる。
「はい。心配かけてすみませんでした。今からあたしも応戦します」
さっきまでの可愛らしい表情は険しい表情に一転し、目にも止まらぬ速さで影に接近し、触手を数本斬り落とす。
すごい…これならカスミが「強力な助っ人」って言うのも納得できる。
「あんたもいつまでも突っ立っていないで、さっさと応戦しなさいよ！」
わ、わかってるよ！いちいちうるさい奴だ。

巨大な剣を構え、戦闘に加わろうとしたときだった。
突然左腕に激痛が走り、剣を落としてしまった。
くっそう、さっきカスミがかけてくれた魔法が解けてきたのか。一応まだ傷はふさがっているけど、痛みが酷くてもう剣を持ち上げられそうにない。
俺の異変に気づいたのか、カスミが仕方なさそうに影に背を向け駆け寄ってきた時だった。
グサッという音と共に、カスミの腹部を気持ち悪いピンク色をした触手が貫いた。
大量に血を吐き、そこに倒れるカスミ。遠くで聞こえる絶叫。

すべてが止まったような気がして

俺はよろよろと思い左腕を引きずって赤く染まったそれに触れる。
「おい、起きろよ。いつまでそこに寝てるんだよ」
まだ血が噴き出し続ける身体を揺さぶるけど、それが動き出す気配はない。
頭の中によぎる考えを必死に否定し続けながら、恐る恐るそっと手に触れると、それはもう冷たくなっていて。
認めたくない『死』という現実。初めてのはずなのに、何故かどこかで味わった、懐かしい感覚。
何もかもが冷たくなった世界で、頬に暖かいものが伝った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6633s/

夢現

2011年11月23日12時48分発行